

東京の教育

日本教師会の今後について

— 現状報告 —

会長 佐藤 健 二

今年（令和二年度）の日本教師会教研大会は、ご案内の通り、コロナ禍により中止となり、来年再び大阪教師会主管で開催することとなりました。大会に代わり研究紀要として「日本の教育」代替論集が刊行され、既にお手元に届いていると思います。

巻頭に若井会長の「日本教師会六十年略史」が掲載されておりますが、それによると東西の教育協議会が一体となり、日本教師会が結成されたのは昭和三十八年二月のことであり、爾来今日に至るまで各支部を中心に、日教組の左派偏向教育を正すべく、我が国の歴史・伝統に基づく教育の正常化及び国民教育の推進を目標に活動を行ってきたことは、会員諸氏の御存じの通りであります。

しかし、それから既に六十年、設立当初御活躍になった先輩諸兄には、既に帰幽された方も多く、また現役会員も高齢化が進み、支部によっては退職の方が現職よりも多くなり、かつてのような現職教員を中心とした実践報告や意見交換も行われなくなってきたというのが実情です。まさに、教師会その

復刊第二十号 東京都教師会発行

(事務局) 横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三二〇

ものの存在の意義が問われる事態となっており、はたしてこのまま教師会としての活動ができるのか、大会が継続できるのか、今教師会は、会の存廃を含めて大きな岐路に立っております。

本会も、「東京の教育」で折に触れてお伝えしておりますが、例会も長く開かれることなく、かろうじて機関紙「東京の教育」により会員の繋がりを維持しているというのが実情であります。藤井副会長と私とで、時々編集会議と称しては会合をもつて情報交換などしておりますが、そこでも本会が主管となつて大会を運営することはもう難しいのではないかとといった話になり、本部執行部にもその旨お伝えしてあります。

私が本部事務局の一端を担っていることもあり、今後の教師会についてどのような議論が進められているかをお伝えし、皆様からの御意見を伺いたいと思っております。

十一月二十五日、会長を交えて岐阜で事務局会を行いました。十時から昼食を挟んで十六時まで、会の歴史を振り返りながら、今日本教師会が抱えている問題について、さまざまな議論をいたしました。会長が本部役員から事前に、今後の教師会についての意見を聞いておりましたが、それによりますと、日本教師会としての解散もやむなしとする意見が

多く見られました。もちろん反対意見もあり、六十年にわたる活動実績から見ても、教師会の存在の意義は大きく、中央への意見・提言も全国組織であるからこそできることであり、支部にはそのような力は無い、自分の教師人生は教師会とともにあったので、解散せずに何とか活動を継続できないか等、様々な御意見がありました。

そこで、事務局としては、来年の大阪大会の総会でこの件を議案として提出して、協議題とする。協議の結果、継続ということになったら、役員人事を見直し、新体制のもとで、今後の運営を考える。解散やむなしという結論になったら、現体制のもとで解散に向けての準備を行い、翌令和四年の大会総会で解散を宣言して、全国組織としての教師会は幕を閉じることとする。その後は、各支部で活動を考えることとなりますが、全国の会員同士の繋がりを維持するために、時に親睦会を開いてもよいのではないかとといった意見もありましたので、そのような付帯意見が付くかもしれません。

来年度の大会は先日送付された「日本教師会総会代替報告書」に記載されているように、今年予定されていた内容で、大阪教師会主管のもとに八月二十一日二十二日に開催が予定されております。

日本教師会の今後の在り方について、また本会の今後について、忌憚のない御意見をお寄せ下さい。

とにかく一日も早くコロナ禍が収束し、以前の様な平穏な生活を取り戻したいものです。皆様の御健勝をお祈りし、来る年の幸多からんことをお祈り申し上げます。

ある学生の課題レポートから

黒羽秀夫

知人のA先生と今回のテーマにつき話をした。幸い私の学校は対面授業を再開できたが、彼の所はパソコンを媒介しての授業を継続中とのことである。彼はその一環として「今年の世情を反映した関連書籍(分野を問わず)を一冊読み、コメントせよ」を課題レポートとして提出させたのであった。そして提出物の中のひとつが気になり、その件で私に連絡してきたのであった。

彼が言うには、それを提出した学生に面談、その本に関してさらにきいたところ、その本は祖父からのオススメ本だという。祖父との談話中、学校に提出する課題レポートの話題から、伝染病は勿論、米国や豪州の山火事の件も大事ということに貸してくれたそうである。

とくにこの本の第一部の条は、今年の下、誠に今読んでも示唆に富むものがある」と、強調された。実はこの本、約五十年前(昭和四十三年刊)の物なので、はじめはピンとこなかったが、読み進むうちに、祖父のいつたとおり最近の状況にも適応し参考になると

実感したそうである。そこでB君(レポート提出者)に、この本の何処の条に注目したのかときくと、幾つかの箇所を開示した。それではその中より二箇所引用してみよう。

「もっとも望ましいのは、激しい病原体をより温和なものに変え、病原体と人体との間に均衡を保つような種類のワクチンを使うことであり、病原体の絶滅を目指すことはもともと愚かであるという。なぜなら、病原体の絶滅などを目指すならば、病原体は地下にもぐって、永遠に終ることのないゲリラ戦になつてしまうからである。

大体、悪いバクテリアなどというものは存在しないのである。人間の体内にある微生物は微妙な生態学的バランスを保っている。人間にとって有害なバクテリアも、より有害なバクテリアを抑制するという機能を果たしている。だから、それらが絶滅すればさらに有力なバクテリアが人間を苦しめるということになるだけなのである。病気はこうした微生物のバランスが崩れるときにおこる。異邦人の持つ病気が恐ろしいのは、その病原体が同邦人の体内になく、したがってそれは既存の体内のバランスを崩すからである。病原体が入っても、体内のバランスが崩れなければ病気にはならないといつてよい。」(四十一頁〜四十二頁)

「私は一年ちがいでこの山火事を見ることはなかったけれども、太陽や空の色、無気味な光やいがらっぽい空気など、その雰囲気は

想像することができる。山火事の数はこの上なく無気味であったにちがいない。山火事という自然の力はタスマニア州やホバート市が、なんともすることができないほど強い力を持つていたのである。現代の技術文明はきわめて強い力を持つているが、それによって自然を統御することなどはできないように思われる。

現代文明は人間にとって確かに強力なものではあるが、自然を統御するほど強力ではない。それなのに、現代の人間は、現代文明は人間がその意思に応じて使いこなすことができ、しかも、相当大幅に世界を変えようと考えているように思われる。それは大層危険なことではないだろうか。

しかし、私は先を急ぎすぎではならない。タスマニアから世界を見ることはよいことだが、タスマニアから見ただけで世界を判断してはならない。文明について、その苛酷さについて、その拡がり方について、そして、その力について、われわれは考えてみなくてはならないのである。」(六十四頁)

要はA先生、この著者のお名前と本の題名しかご存知なかったので、私に連絡してきたのである。私は学生時代、この本の著者である高坂正堯氏に地政学のマッキンダーについて質問したことや、この本が二〇一六年復刊(新潮選書)された等の話をした。なおこの本とは、高坂正堯著『世界地図の中で考える』、また引用文は、その第一部「タスマニ

アにて」から。

(会員)

多磨の戦歴碑(二)

藤井雅和

東京の多磨墓地には多くの軍人の墓所がある。大正十二年の開業当時はまだそれほど埋葬者が多くはなかつたが、昭和九年、海軍元帥の東郷平八郎大将が死去し、この墓地の名誉霊域に葬られたことにより、一挙に全国的にその名が知れて、ここに葬られる人がふえたといふ。その後多磨霊園と名が改められるが、更に同じく山本五十六大将、古賀峯一大将と合はせて三人がこの名誉霊域に葬られ、時代的な背景もあつて海陸軍の軍人が多数埋葬されるやうになつたのである。

さうした軍人達の墓域に、墓誌碑とは別に戦歴碑が建てられてゐるものも多い。すでに八十年近くを閲し、碑面も苔むして読みづらなものもあるが、読んでいくと士官兵を問はず、華やかな勲功や壮烈な最期の模様が刻まれ、万感交々至るものがある。

そのひとつに、**國生家の墓がある。**

海軍大佐國生行孝は、海軍兵学校三十七期生(明治四十二年十一月卒業)であるが、他の生徒よりも年齢が幾分高かつたやうである。

また卒業順位(ハンモックナンバー)も中位程度であつた。そのためか、軍歴としては同期に比べて華々しいところは少ない。最後は

「大和」艦長であつたが、この「大和」は初代で、戦艦ではなく機帆船の測量艦である。

海兵のこの期は、大東亞戦争時には現役を離れてゐた者もあり、戦死者も比較的少なかつたやうだ。國生行孝も予備役後の昭和十七年には特務艦の監督官を最後に艦を降りてゐたが、しかし、終戦前の昭和二十年三月に死去してゐる。死去の経緯は不明である。そしてみづから昭和十八年に長男の為に建てたであらう墓に入ることになつた。

その國生家の墓石の左面には七人の戒名と俗名が彫つてある。初めの二人は大正十一年生ですぐに亡くなつた「嬰女」と、大正五年に生まれ昭和五年に十四歳で夭折した「童女」である。

三行目には「彰忠院龍潭直心居士 海軍少佐 國生直扶 昭和十七年九月廿五日戦死 行年廿七才」とある。この直扶は大正四年の生れで、「なほすけ」と読むやうだ。

次が國生行孝、「春濤院行雲孝道居士 海軍大佐正五位勲三等國生行孝 昭和二十年三月二十六日歿 行年六十才」と刻まれてゐる。既述のやうに明治十八年生まれとなる。

五人目は「大姉」号の女性。「昭和二十年五月二十六日歿 行年五十一才」とあり、そこから明治二十七年生と解る。おそらく行孝の妻であらう。

六人目の人物は「忠峰院碧雲眞海居士 海軍大尉 國生眞三郎 昭和二十年五月廿七日戦死 行年二十三才」とある。従つて大正十

一年の生まれと言ふことになる。墓碑先頭の嬰女と同一年であらうか。一書に「なほさぶらう」とあるが称へは不明である。

最後は「居士」号の男性。平成十七年に八十五歳で歿してをり、大正九年生である。

ここまでの所から推測するに、この家族は行孝とその妻を両親とし、夭折した二人の娘のほか、長男が直扶、次男が平成十七年歿の男性、三男が眞三郎であらうと思慮される。

また、墓碑右側には平成二十年代に相次いで高齢で亡くなつた國生姓の女性三名が刻まれてゐるが、続柄は不明である。

さて、この國生家の墓所には、二つの戦歴碑が建てられてゐる。國生直扶と國生眞三郎のものである。一つの墓域に二基の戦歴碑が立つてゐるのも、多磨霊園広しといへど教少ないであらう。広い墓域も多い霊園内としては比較的質素な墓所で、中央の墓石の前に、二つの小さな戦歴碑は向きあふやうに立つてゐる。

(続く)
(会員)

戦前の中学国語の教科書を読む(十四)

「次の文章は、八波則吉著『現代國語讀本』巻四(現在の中学二年後期)(昭和十年版)所収のものである。漢字、送り仮名は原文通り、読み仮名は、適宜新たに加へた。」

自國語

上田 萬年

言語は、之を話す人民に取りては、恰も其の血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、之を物に譬ふれば、「日本語は日本人の精神的血液なり」と言ふを得べし。日本の國體と日本人の人類とは、實に此の精神的血液を以て維持せられ結合せらる。

言語は其の國民の標識となるのみならず、之と同時に、又一種の教育者即ち情深き母ともなるなり。我等の生るゝや否や、此の母は我等を其の膝の上に迎へ取り、ねんごろに國民的思想と國民的感動とを教へ込みくるゝなり。されば、此の母の慈愛は誠に天日の如しと言ふべきなり。苟も此の國に生れ此の國民の子孫たる者は、誰か此の光を仰がざるべき。

言語には、我等が心中に一日も忘れ兼ねる生活、殊に人生の神代とも言ひつべき小兒の頃の記念が結合せられ居るものと知るべし。我等が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果てて、すやすやと眠に就かんとする折、母君は如何に優しき聲にて「寢よ。」との歌を歌ひ給ひしか。頑是なき子供心にわるふざけなどして打廻れる時、厳しき父君は如何に嚴かに教訓を垂れ給ひしか。さては春の麗かなる野邊に友達と紫雲英などを摘み歩き、あるは、秋の日赤き垣根の下に餘念なく栗の實を拾ひし、其の當時より用ひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、何とも言はれ

ぬ快感を我等に與ふるなり。次には小中學校の言葉、次には學生の言葉、或は市民としての言葉、或は職業により階級により地方によりての言葉など、皆それらの生活を此の上で反映す。故に、外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて外國語の教育のみ受けたる人ならざる限りは、此の言語の恩澤を被るべし。

されば、國民が其の國の言語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ず其の自國語を尊び、決して之を措きて他の國語を尊崇せず、情の上より自國語を愛し、理の上より其の保護・改良に従事し、以て眞正の國民を養成せんことを力む。凡そ何れの國を問はず、苟も國家的觀念の上より、其の國民の一員たるに愧ぢざる人物の養成を以て目的とする以上は、先づ其の國の言語、次に其の國の歴史、此の二つを蔑にしては、決して效を收むること能はず。これ國民たる者の須臾も忘るべからざることなり。

(國語のため)

(原注)

上田萬年 愛知縣の人。慶應三年生。國語學者。文學博士。

(補注) 東京帝國大學國語研究室初代主任教授。東京帝國大學文科大学長等歴任。

□短信寸評□

我が尖閣諸島を窺ふ某国の「公船」なるも

のが、連日のやうに領海を侵犯し、接近してゐることは、一部を除いた報道機関の隠蔽により、多くの國民が知らされてゐない。日夜生命を賭して戦つてゐる海上保安庁や海陸空自衛隊の活動に関心は薄いやうだ。

同じく隠蔽によつて世界中に拡散された悪質な新型感染症は、我が国でも政府や識者などの指導を守らない大衆によつて危機的に拡大してゐる。我慢を知らない一部の徒輩は相変はず危険地域に足を踏み入れてゐる。

大衆が自ら防疫しなければいけないのに、医療を逼迫させた上安易に自衛隊に頼らうとしてゐる。佐藤正久参議院議員の「自衛隊は便利屋ではない」といふ発言は油断する大衆に重い警鐘となつてゐる。(ふ)

お願い

一、会費納入

年額 二千元

口座 「みずほ銀行」港北ニュータウン支店
店番号 743 普通預金 1330150

名義 佐藤健二
二、原稿募集

「東京の教育」への会員の皆様のご投稿を
お待ちしております。

送り先は題字下にあります。また、メール
の送り先は次の通りです。

事務局アドレス(佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp